

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	今井 理恵
学位	博士（教育学）
学位記番号	新大院博（教）第30号
学位授与の日付	令和4年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	Genre-Based Reading Instruction and Assessment Using Textbooks for High School English Education: An Investigation Into Genre-Appropriate Questions and Tasks (高校英語における教科書を用いたジャンル準拠リーディング指導と評価：ジャンルに正対する発問課題の検討)
論文審査委員	主査 教授 松澤 伸二 副査 教授 加藤 茂夫 副査 教授 本間 伸輔

### 博士論文の要旨

本論文は、高校英語教育において生徒を優れた英語の読み手に育てるために、読む技能の指導をジャンル準拠リーディング指導 (Genre-Based Reading Instruction, GBRI) で教科書を用いて行う際、その発問課題はどうあるべきかを明らかにすることを目的とする。そのために、日本国内と海外の英語学習者向け教科書、学習指導要領、リーディングの熟達度を測る試験などの各種資料を調査する方法を採用した。その結果、GBRI での発問課題 (ジャンル正対課題) は、「テキストについて知っていること」と「テキストで理解したこと」を問うものであることが判明した。前者で当該テキストについての「ジャンルの知識」(genre knowledge) を問い、後者で当該テキストについて「情報統合による推論的理解」のレベルでのテキスト理解を問う。本論文の成果は、日本の高校英語教師が GBRI でリーディングの授業を改善する目的に有益であると考えられる。

本論文は、以下のとおり構成されている。第1章は論文の背景と研究課題を説明している。日本の英語教育の指針を示す学習指導要領は、高校英語で「まとまりのある文章」(テキスト) を教え、学ぶことを求めている。この領域での優れた先行実践はオーストラリアの学校英語教育に見られる。それはシドニーの小学校での母語としての英語のテキストを書く指導を改善する試みが最初であった。この指導はテキストのジャンル (genre, 特定の文化で生じる、日常的、学問的、文学的テキストの、区別が付き頻発する型) に注目し、「ジャンル準拠教育 (genre-based pedagogy)」と呼ばれている。ジャンル理論に基づくこの指導法を採用する日本の教師はまだ多くないが、我が国の高校英語教育の発展にも寄与すると考えられる。英語を読むことに困難を抱える高校生が少なくないことから、本論文では読む技能を取り上げ、高校の英語教科書を使って GBRI を行う際に必要になる、ジャンルに正対した発問課題の特徴を明らかにすることを研究課題とした。

第2章は先行研究を紹介している。ジャンル理論には Halliday の選択体系機能言語学を基にしたシドニー学派のもの、Swales のジャンル分析に基づいた「特定目的のための英語」でのもの、北米の構造主義の影響を受けた新修辞学グループのものがあるが、本論文はオーストラリアの学校教育が採用しているシドニー学派の理論に基づくことにした。テキストのジャンルやテキストタイプ (text type, テキストの体裁) に関連する知識は「ジャンルの知識」と呼ばれる。それはテキストの社会的目的、構成の型、言語の特徴、レジスターなどについて、特定の文化やコミュニティが作り上げている慣習についての知識である。ジャンルの知識を使ってテキストを読み書きすることは、現実世界でのやり取りの参加に必須である。テキストの読み手はジャンルの知識を活用することで、自分が既に知っているテキストと似ているか否かを判断して適切に対応することが可能になる。英語圏の特定の文化とコミュニティに特有のジャンルの慣習についての十分な知識を持っていない日本人英語学習者には、この種の知識の明示的な指導が有益であろう。

第3章は研究課題を解明するために行われた5つの研究を説明している。研究1では高校英語におけるジャンルの情報を調査した。高校学習指導要領と「コミュニケーション英語I」と「英語表現I」の英語検定教科書を調べたところ、ジャンルに関する情報の提示が不十分だった。国語の学習指導要領のようにジャンルに関する情報を学習の前面に置いて、ジャンルとテキストタイプを区別し、両者を明示した教科書が編纂されれば GBRI が可能になることを示した。研究2では「コミュニケーション英語I」の英語検定教科書の本課テキストでのジャンルとテキストタイプの種類と頻度を調査した。結果として、叙事的説明文が多く、またリード文でのジャンルに関する情報が不十分なことが判明した。優れた読み手を育てるためには多様なジャンルのテキストに触れる機会を保障すべきである。研究3では高校英語に GBRI を導入することを念頭に、「コミュニケーション英語I」のうち、物語文、叙事的説明文、意見文のテキストに付いている読みの発問課題が生徒にジャンルを意識させるものであるかを調べた。その結果、ジャンルやテキストタイプに正対する発問課題と判定された設問は、全体の20%以下と非常に少なく、現状では GBRI の実施が困難なことが判明した。研究4では新しい中学校英語検定教科書にジャンルとテキストタイプの情報がどの程度明示されているかを調査した。結果は、ジャンルの情報については読むことを除く他の6領域で最小値でも全体の約60%で明示され、テキストタイプの情報についても最小値の読むことでも約70%で明示されており、新教科書を用いる GBRI は十分に可能であることが判明した。研究5では新中学校英語教科書のリーディングのテキストに付されている発問課題の特徴を抽出し、GBRI で用いる発問課題(ジャンル正対課題)はテキストについて何を問えばよいかを検討した。その結果、ジャンル正対課題はテキストのジャンルの知識を問うこと、それに PISA 2018 の枠組みの「情報統合による推論的理解」のレベルでのテキスト全体の理解を問う、「評価・熟考」のレベルでの理解は問わないことが判明した。そこで問われるべきことは、物語文や意見文などのジャンルごとに異なるテキストの構成や言語的特徴などの理解である。

第4章は以上の研究に基づく結論を、高校英語教育で GBRI で優れた読み手を育てるための提言として示している。それらは、(1) 検定教科書と学習指導要領にジャンルの知識を指導することを明記する、(2) 検定教科書に片寄りなく幅広いジャンルを掲載する、(3) ジャンルの知識を明示的に指導する、(4) リーディングのテキストの発問課題にジャンル正対課題を取り入れる、(5) ジャンル正対課題は「テキストについて知っていること」と「テキストで理解したこと」の

両者を問う、(6) ジャンル正対課題にはテキストの構成を整理するグラフィックオーガナイザーを用いる、(7) 学校段階(学年別)×24 エレメンタルジャンル(ジャンルの最小区分)の細目を作成する、である。このうち「テキストについて知っていること」については、この種の知識を確かめるための発問例を、日本の中学と高校の英語教師用に海外の文献を参照して作成した。また、「テキストで理解したこと」を問う例を、実際の中学と高校の教科書に掲載されているテキストを用いて示した。さらに、各ジャンルとグラフィックオーガナイザーの組み合わせを例示した。

以上の検討に基づき終章において、本論文では語彙、句、文のレベルでの理解の指導、それに「評価・熟考」レベルでのテキスト理解の指導を検討していないが、いずれも高校生がテキストの優れた読み手になるために必要なリーディングの下位技能であり、これらを GBRI にどう取り込むことができるかを今後の研究課題としたい、と結んでいる。

### 審査結果の要旨

本論文は、日本語を母語とする高校生英語学習者が苦手とすることが少なくない、まとものある英語の文章の読解力の育成を、これまで日本で実践されることが少なかったジャンル準拠リーディング指導を導入することで改善しようとした点で注目されるべきものである。国内外の学習指導要領や学力調査に関わる文献を丁寧に調べたことに加え、数多くの日本の高等学校と中学校の英語検定教科書の読みの紙面等を綿密に分析して実態を明らかにし、ジャンル準拠リーディング指導を実現するための具体的な提言をまとめることができたという点は高く評価される。特に、ジャンル準拠リーディング指導を行う際に必要になる、テキストが属するジャンルに正対する読解用の設問はいかにあるべきか、その特徴を明らかにしたことに独自性が認められる。

本論文での、ジャンル準拠リーディング指導で教科書を用いて読みの指導を行う際の発問課題(ジャンル正対課題)の特徴を明らかにするという研究課題についての結論は、主に学習指導要領や検定教科書やリーディングの熟達度を測る試験などの文献資料の分析に基づくものであり、実際に日本語を母語とする高校生にジャンル準拠リーディング指導を行って、ジャンル正対課題の効果を実証的に検証して得たデータに基づくものではない。そのため、その根拠が十分とはいえない。本論文でもその可能性が指摘されているように、ジャンルによっては学習者の母語でのジャンルの知識の転用が容易で、ジャンル正対課題を設定する必要がない場合も考えられる。

しかしながら、この点は今後の実証的な研究に待つべきものであり、その方向性を示した本論文の学術的価値を損なうものではない。また、本論文で示された、ジャンルの知識を問う際の教師の具体的な発問例、それに実際の中学校と高等学校の英語検定教科書の複数の本課テキストについて考案されたジャンル正対課題の例は、今後ジャンル準拠リーディング指導に取り組む教師や研究者のこの分野の理解を助けるものである、という点で評価できる。

なお、本論文ではジャンルやリーディングの理論についての学術的な考察が充実しているが、高校英語教育におけるリーディング指導の改善策に関わる問題を中心に考察していることから、授与する学位は「博士(教育学)」が適当であると判定した。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士(教育学)の学位を授与するに値するものと判断した。